後期近代英語における残留動詞移動とknow類動詞の文法化

縄田　裕幸*

Hiroyuki NAWATA

Residual Verb Movement in Late Modern English and Grammaticalization of *Know*-Class Verbs

要　　旨

本稿の目的は，縄田（2016）の議論を発展させ，英語の史的コーパス調査から英語史における残留動詞移動現象の実態を明らかにするとともに，生成統語論の枠組みでこの現象を分析することである。初期近代英語において，多くの動詞は文中副詞や否定辞notに先行する語順からこれらの要素に後続する語順へと移行したが，know, believe, doubt, careなど一部の動詞はこの語順変化に抵抗し，否定文において引き続き古い語順を示し続けた。統語的パラメタ変異に基づく従来の分析では，これらの動詞の例外的振る舞いを説明することは難しかったが，本稿では文法化の観点からこの現象の原理的説明を試みる。具体的には，knowなどの動詞は初期近代英語で１人称主語における主観的用法が引き金となって軽動詞としての用法を発達させ，これらがNegPよりも上位で基底生成された結果，見かけ上の残留動詞移動現象が生じたと主張する。いわゆる動詞移動は単一の統語操作ではなく，統語的・音韻的・語彙的要因が絡み合った複合的な現象として捉えられる。この分析の帰結として，統語的移動に関するかぎり動詞の一致形態素が動詞移動の必要十分条件であるとする「豊かな一致の強い仮説」が支持されることになる。

【キーワード：残留動詞移動，文法化，豊かな一致，否定接辞，二重詰め Neg フィルター】

１．序

一般に，現代英語の本動詞は否定辞notおよび動詞句（VP）を修飾する副詞に後続し，本動詞がこれらの要素に先行する語順は許されない。

(1)　a.　I did **not study** linguistics.
　　b.　* I **studied not** linguistics.
(2)　a.　I **often have** hamburgers for lunch.
　　b.　* I **have often** hamburgers for lunch.

英語の歴史をさかのぼると，かつては（1a）や（2a）の語順は観察されず，もっぱら（1b）や（2b）のような語順が用いられていた。しかし，初期近代英語（Early Modern English: EModE）において（1a），（2a）の語順が出現しはじめ，後期近代英語（Late Modern English: LModE）で現代英語のパタンが確立した（Roberts（1993），Vikner（1997），Rohrbacher（1999））。[1]

生成統語論において，この語順の変化は動詞語幹と屈折辞の融合方法に関するパラメタ値の変異によって分析されてきた。具体的には，否定辞notおよびVP副詞が文の階層構造で屈折辞と動詞語幹の間に位置するという仮定のもと（Emonds（1978）），EModEまでは動詞句の主要部Vが屈折辞の位置まで「主要部移動」することで「本動詞－not/副詞」語順が派生されていたが，LModE以降は屈折辞がVまで下がる「接辞下降」が採用されたことで「not/副詞－本動詞」語順が派生されるようになった，というのが標準的な分析である。

しかし，この分析では捉えることが難しい歴史的事実がある。多くの動詞はEModE中に「本動詞－not/副詞」語順から「not/副詞－本動詞」語順へと移行したが，know, believe, doubt, careなどの一部の動詞（以下know類動詞）はこの語順変化に抵抗し，引き続き古い語順を示し続けた。[2]

(3)　a.　and she **knew not** how to forgive.
　　（ANDREWS1-1785-2,2,198.302）
　　b.　I **doubt not** your capacity to amend me at all.
　　（BURNEY -1768-2,1,31.681）

この現象を「残留動詞移動（residual verb movement）」と呼ぶことにしよう。一般に，統語演算のパラメタ値は関連する操作（たとえば主要部移動）に対して一律に作用するため，ある一部の語彙を例外扱いすることはできない。すなわち，残留動詞移動は「主要部移動から接辞下降へ」という単純なパラメタ変化では扱うことができないのである。

この問題に対して，筆者は縄田（2016）において，主要部移動に豊かな屈折辞によって駆動されるものと否定接辞によって駆動されるものの二種類があると提案することで解決を試みた。しかし，その分析は必ずしも十分でなく，いくつかの問題点が残されていた。とりわけ，なぜ他ならぬknow類動詞がLModEまで主要部移動が可能であったのかについて，満足な説明を与えるには至っていなかった。また，縄田（2016）の脱稿後にLModE

*　島根大学教育学部講座言語文化教育講座

のタグ付きコーパスとしてThe Penn Parsed Corpus of Modern British English, 2nd edition（PPCMBE2）がペンシルバニア大学よりリリースされ，利用可能となった。そこで，本稿では近代英語（Modern English: ModE）におけるknow類動詞の実態をPPCMBE2等で再調査するとともに，残留動詞移動に対する縄田（2016）の分析に修正を加えることを試みる。具体的には，know類動詞が主語の認識・思考を表す点に注目し，次の２点を主張する。(i) know類動詞は，ModEで１人称主語における主観的意味が引き金となって軽動詞（light verb）の用法を発達させた。(ii) この変化は文法化（grammaticalization）の一種として捉えることができる。

２．言語事実と論点整理

はじめに，EModEにおける定形動詞と他の関連要素との語順変化について概観しよう。動詞移動の消失を扱う史的統語論研究において必ずといってよいほど参照されるのが，迂言的doの発達に関するEllegård（1953: 162）のグラフである。

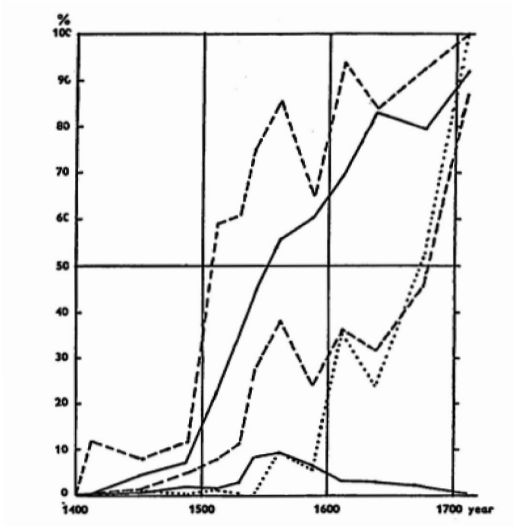


図１：文タイプごとの迂言的doの拡大
（Ellegård（1953: 162））

これは，文のタイプごとに迂言的doがどの程度拡大したかを年代ごとにまとめたものである。上の破線は否定疑問文を，上の実線は肯定疑問文を，下の破線は否定平叙文を，下の実線は肯定平叙文を，そして点線は否定命令文をそれぞれ表している。ここで注目すべきは，疑問文（上の破線と上の実線）と否定文（下の破線と点線）におけるdo支持拡大の時間差である。前者でdoの使用が1500年代に急激に増加し，1600年ごろに70%に達したのに対し，後者では同様の上昇が1600年代に生じており，両者の間におよそ１世紀の差があることが分かる。

動詞移動消失に関する従来の研究が主として定形動詞と否定辞notの相対的語順に依存したのに対し，Haeberli and Ihsane（2016）は，定形動詞と副詞の語順変化にも注目すべきであるとして，独自の資料調査を行っている。それをまとめたのが図２である。一番上の折れ線が否定平叙文におけるS-V-not語順の割合の推移を示しており，それ以外の３つの折れ線は，副詞heartily/humblyを含む文，副詞neverを含む文，副詞と目的語を含む文において，S-V-adv語順の割合がどのように推移したかを示している。

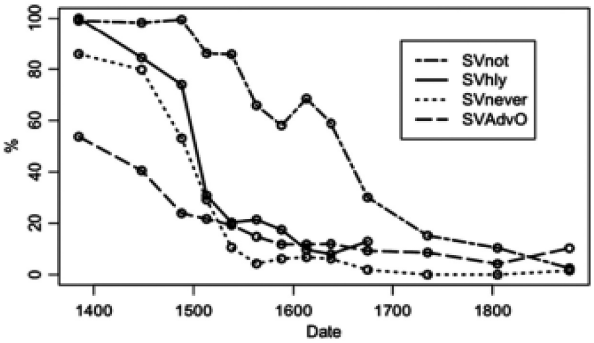


図２：S-V-not語順とS-V-adv語順の推移
（Haeberli and Ihsane（2016: 520））

S-V-not語順は1600年代に大きな減少を示しており，同時期の否定文における迂言的doの発達（図１参照）を裏付けている。それに対し，各種副詞を含む文でのS-V-adv語順はすでに1500年代に減少しており，1600年ごろには20%程度まで落ち込んでいる。つまり，副詞を越える動詞移動は，否定辞を越える動詞移動よりもおよそ１世紀早く進んでいたことになる。また，図１と図２を比べると，疑問文におけるdo支持の拡大（=主語・本動詞倒置の衰退）と副詞を越える動詞移動がほぼ同じ時期に衰退していることが分かる。

では，同じ時期にknow類動詞はどのような語順パタンを示していたであろうか。know, believe, doubt, careを対象に，EModEのタグ付きコーパスThe Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English（PPCEME）を用いて以下の語順の出現数と各文タイプ内での割合を調査した。(i) 直接疑問文における「本動詞－主語」語順と「do－主語」語順，(ii) 否定平叙文における「本動詞－not」語順と「do－not」語順，(iii) 副詞を含む肯定平叙文における「本動詞－副詞」語順と「副詞－本動詞」語順。その結果をまとめたのが，表１である。[3]

表１：EModEにおけるknow類動詞と関連要素の相対語順

	V>subj	do>subj	V>not	do>not	V>adv	adv>V
know	19 (23%)	65 (77%)	241 (72%)	93 (28%)	11 (16%)	58 (84%)
believe	2 (6%)	29 (94%)	46 (82%)	10 (18%)	2 (12%)	15 (88%)
doubt	2 (22%)	7 (78%)	106 (92%)	9 (8%)	0 (0%)	3 (100%)
care	7 (78%)	2 (22%)	47 (82%)	10 (18%)	1 (50%)	1 (50%)

(PPCEME による調査結果：上段は出現数，下段は割合)

本動詞が主語に先行する語順，ならびに本動詞が副詞に先行する語順は，know類動詞においても劣勢である。それに対し，本動詞が否定辞notに先行する語順は，依然

として高い割合を示している。とりわけ，doubtでは92%と非常に高くなっている。全体的に，EModEにおいてはknow類動詞も他の動詞と同じ傾向を示しているといえるだろう。

図１，図２，表１から分かる要点は，次のようにまとめられる。

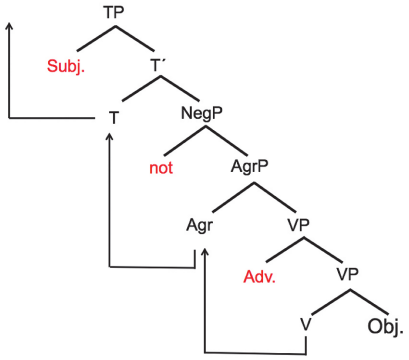
(4) a. 1500年代に副詞を超える動詞移動と主節疑問文における主語・本動詞倒置が衰退する一方で，否定辞を越える動詞移動はEModEの後半まで生産性を維持した。

b. 同様の傾向はknow類動詞でも観察される。とりわけdoubtにおいて「本動詞-not」語順の生産性が高い。

LModEのコーパス調査結果の報告へと移る前に，EModEの状況，とりわけ（4a）の事実を言語理論がどのように捉えることができるかを考えてみよう。

Pollock（1989）以降の標準的な句構造理論では，文中位置に生じる副詞がVP付加位置に生じるのに対し，否定辞notはVPの上位にある機能範疇NegP内に生じると仮定されている。

(5) Pollock（1989）



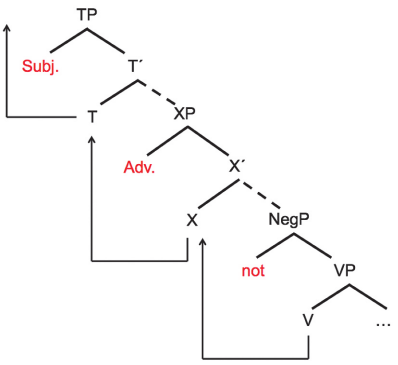
Vが主要部移動によって上位の機能範疇（たとえばAgr）に上昇すると「本動詞－副詞」語順が派生され，さらに連続循環移動を繰り返して屈折辞（上ではTと表記）の位置まで達すると「本動詞－not」語順が得られる。

また，直接疑問文における「本動詞－主語」語順にはT-to-C移動が関与するため，この語順が派生されるには本動詞がTまで上昇していることが必要条件となる。通時的変化の観点からは，V-to-T移動が消失する過程では句構造の上位から徐々に消失が進行していったと考えるのが自然であろう（Nawata（2009, 2011））。すなわち，(5)の句構造のもとでは，はじめにVはAgrまでしか移動できなくなり，その後Agrにも動けなくなってVPに留まるようになったと考えられる。

これらの仮定から，語順の変化に関して，まずは「本動詞－not」語順と「本動詞－主語」語順がほぼ同じ時期に消失し，それに引き続いて「本動詞－副詞」語順がなくなったという予測が成り立つ。しかし，実際には（4a）でまとめられているように，まず「本動詞－主語」語順と「本動詞－副詞」語順が衰退し，その後で「本動詞－not」語順が消失した。したがって（5）の句構造は，そのままではEModEで生じた動詞移動の衰退過程を正しく捉えられない。

他方で，Haeberli and Ihsane（2016）は，伝統的な（5）とは異なる（6）の構造を提案している。ここでは，文中副詞がNegPの上位にある機能範疇（仮にXとする）の指定部を占めている。

(6) Haeberli and Ihsane（2016）



句構造の上位からV-to-T移動が消失したという前述の仮定にしたがえば，VはまずTへの移動を停止し，その後Xにも移動しなくなってVPに留まるようになったはずである。したがって，この構造は「本動詞－副詞」語順がまず衰退し，その後で「本動詞－not」語順が消失したことを正しく予測する。[4]

しかしながら，(6) はEModEにおける文中副詞と否定辞notの語順を正しく捉えることができない。(7) に示すように，これらの要素が共起する場合，現代英語と同様通例notが副詞に先行していた。

(7) a. but I **approve not ful** this conjecture.
（LELAND-E1-H,73.87）

b. Nor another mans wyckednes **taketh not awaye** the proper honoure frome good folke.
（BOETHCO-E1-P2,96.418）

c. but by Cost and Inquest of this Pious Benefactor, Sweeter Waters are at this time produced, something more remote, for Men to Drink, though the Cattel **refuse not generally** the other.
（FRYER-E3-P2,2,201.112）

副詞がnotよりも階層上上位にある（6）の構造は，この語順を説明することができない。他方で，notが副詞よりも上位にある伝統的な（5）の構造は，これらの事実を自然に捉えることができる。

まとめると，Pollock（1989）の伝統的句構造とHaeberli and Ihsane（2016）の提案はともにEModEの言語事実を正しく捉えることができない。前者は共時的語順につい

ては正しい予測をする一方で通時的変化を説明することができず，後者は通時的変化の事実とは適合するものの共時的事実とは矛盾する。またいずれの分析も，doubtがとりわけ高い「本動詞-not」語順の生産性を示したという（4b）の点については，何の手がかりも与えてはくれない。

本稿では，3節以降で（5）の伝統的句構造に基づいた代案を提示するが，まずは言語事実の観察へと議論を戻し，LModEにおけるknow類動詞の残留動詞移動の実態について報告する。PPCMBE2を用いて，表1と同じ文タイプにおいて，競合する語順パタンがどのように推移したかをまとめたのが表2である。

表2：LModEにおけるknow類動詞と関連要素の相対語順

	V>subj	do>subj	V>not	do>not	V>adv	adv>V
know	10 (4%)	258 (96%)	264 (32%)	557 (68%)	3 (2%)	139 (98%)
believe	3 (8%)	33 (92%)	36 (36%)	65 (64%)	1 (2%)	47 (98%)
doubt	0 (0%)	3 (100%)	35 (53%)	31 (47%)	0 (0%)	5 (100%)
care	1 (33%)	2 (66%)	16 (26%)	46 (74%)	0	0

(PPCMBE2 による調査結果：上段は出現数，下段は割合)

表1と比較すると，直接疑問文と副詞を含む肯定平叙文において「do－主語」「副詞－本動詞」の割合がいっそう高まり，現代英語の語順がほぼ確立したといってよいであろう。他方で，否定文では全体的に「do－not」語順が「本動詞－not」語順を逆転したものの，後者が30%程度の割合で観察され，一定の生産性を維持していたことがわかる。さらにdoubtに関しては，LModEでも依然として「本動詞－not」語順が優勢である。

LModE の残留動詞移動が化石化・イディオム化された表現でなかったことは，（8）のようにさまざまな構文で観察されることからも明らかである。

（8） a. He saith, I **know not**.（自動詞）
（ERV-NEW-1881, 9, 1J.798）

b. Ah! but you **know not** the humiliating avowal I have to make?（名詞句目的語）
（BROUGHAM-1861, 28.1030）

c. And I **knew** him **not**:（代名詞目的語）
（ERV-NEW-1881, 1, 20J.63）

d. Again, the world‘s refinement is based upon Christianity, even though the world **knows not** of it.（前置詞句目的語）
（PUSEY-186X, 283.66）

e. I **know not** what I shall have from his Hands,（節目的語）（DAVYS-1716, 50.898）

f. but there standeth one amidst you, whom ye **know not**;（目的語の関係代名詞化）
（NEWCOME-NEW-1796, 1, 20J.54）

g. Whether this was a Defiance or Challenge, we **know not**;（節目的語の話題化）
（DEFOE-1719, 193.12）

（8a-e）に示すようにknowは自動詞としても他動詞としても用いられ，広い範囲の補部をしたがえることができた。また，その補部は（8f, g）のように各種の移動操作を受けることもあった。したがって，know類動詞の「本動詞－not」語順は固定表現ではなく，統語が関係する現象であるといえるだろう。

以上の議論から，ModEにおける動詞移動の消失過程をまとめると図3のようになる。

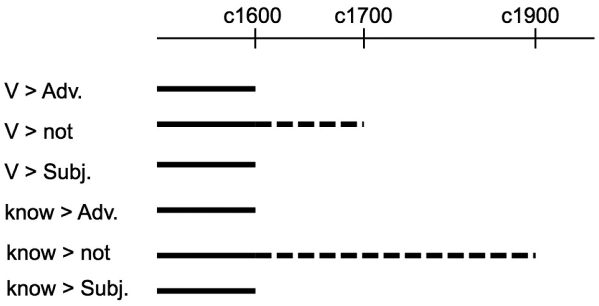


図3：ModEにおける動詞移動消失の過程

直接疑問文における主語と本動詞の倒置，および副詞を越える動詞移動は1600年くらいにはほぼ消失したが，動詞が否定辞notに先行する語順はEModEにおいて引き続き観察された。LModEになると，他の動詞が「do－not」語順へと急速に変化する中で，know類動詞はこの流れに抵抗し，「本動詞－not」語順を維持した。これが残留動詞移動と呼ばれる現象である。

この一連の変化を言語理論で分析する際には，以下の3つが論点となる。

（9） a. 副詞と否定辞の変化のずれ：なぜ否定辞を越える動詞移動が副詞を越える動詞移動よりも長く残ったのか。

b. 疑問文と否定文の変化のずれ：なぜ否定辞を越える動詞移動が主語・本動詞倒置よりも長く残ったのか。

c. 残留動詞移動の語彙特異性：know類動詞がLModEまで否定文の動詞移動を保持し続けたのはなぜか。

これらの問題を解決するためには，主要部移動の駆動因に着目する必要がある。本稿では，いわゆる動詞移動が単一の操作ではなく，統語的・音韻的・語彙的要因が相互に作用した結果生じたものであるとの立場から分析を行う。

3．副詞を越える動詞移動[5]

はじめに，副詞を越える動詞移動の消失について考察しよう。動詞語幹と屈折辞を融合して定形動詞を形成す

る際の一般的アルゴリズムを以下のように仮定する。

(10) 統語構造[$_{XP}$ X [$_{YP}$ Y … [$_{VP}$ V]]]に含まれる複数の主要部X, Y, … Vからなる動詞複合体を作る過程において，
  a. 語幹V以外の機能範疇はすべて接辞特性を持っていなければならない。
  b. 語幹Vから機能範疇Yまでを含む複合体は統語部門における主要部移動によって形成される。
  c. 最上位の機能範疇XとYを融合する際には，可能な限り音韻部門における接辞下降が利用される。

関連する接辞特性は，時制素性と一致素性によって担われる。このうち時制素性は機能範疇Tによって担われるが，一致素性については，Nawata（2009, 2011）にしたがい，動詞屈折接辞の形態的豊かさと連動してその統語的位置が通時的に推移したと仮定しよう。表３に示すように，後期中英語から16世紀までは，過去形で時制と一致の形態素が独立して現れ，２人称単数形の一致形態素-stが保持されていた。この時代を「豊かな一致の時代」と呼ぶ（Vikner（1997), Bobaljik（2002））。

表３：後期中英語－c1600の動詞変化表

	現在形		過去形	
	単数	複数	単数	複数
1 人称	-e	-e	-de	-de
2 人称	-st	-e	-dest	-de
3 人称	-th	-e	-de	-de

それに対し，17世紀以降は過去形で一致形態素が消失し，２人称単数形の一致形態素-stが現在形でも具現化されなくなった。現代英語まで続くこの時代は「貧しい一致の時代」と呼ばれる。

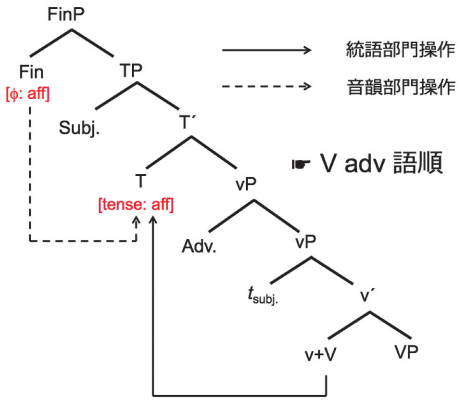
表４：c1600－現代英語の動詞変化表

	現在形		過去形	
	単数	複数	単数	複数
1 人称	–∅	–∅	-d	-d
2 人称	–∅	–∅	-d	-d
3 人称	-s	–∅	-d	-d

Nawata（2009, 2011）は，動詞の一致素性は豊かな一致の時代には機能範疇Finによって，貧しい一致の時代にはTによって，それぞれ担われていたと論じており，本稿でもその仮定を踏襲することにする。

以上の理論的枠組みが与えられると，16世紀までの動詞複合体形成の過程は（11）のように表される。ここではPollock（1989）などにしたがい，文中副詞が動詞句（ここではvP）に付加していると仮定する。また以下の樹形図において，実線の矢印は統語部門における主要部移動を，破線の矢印は音韻部門における接辞下降を，それぞれ表す。

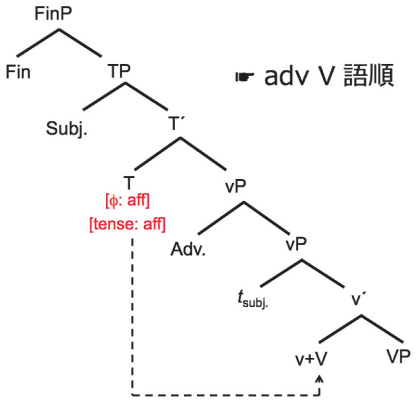
(11) c1600まで



動詞屈折が豊かであった16世紀までは，動詞語幹（上図ではv＋V）はTの時制接辞およびFinの一致接辞と融合しなければならなかった。（10b, c）の仮定より，動詞語幹はまず統語部門でTまで移動し，その後音韻部門でFinが接辞下降することで動詞複合体が形成された。動詞語幹がTに上昇する際に副詞を越えるため,「本動詞－副詞」語順が派生された。

しかし，16世紀以降に豊かな一致が衰退してTが時制と一致の素性をともに担うようになると，動詞語幹が主要部移動する必要はなくなり，（12）のようにTが音韻部門で接辞下降することで事足りるようになった。

(12) c1600以降



元位置に留まるv+VがvP付加位置に生じている副詞に後続することになるので，現代英語タイプの「副詞－本動詞」語順が派生されるようになった。

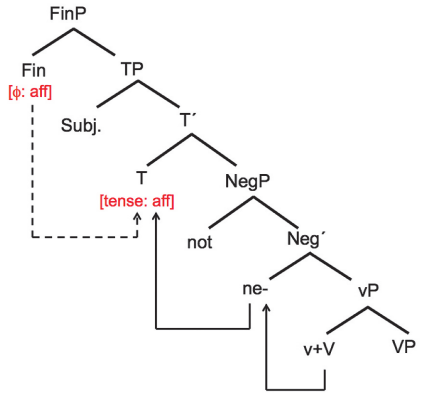
４．否定辞を越える動詞移動

次に否定文の派生を考えてみよう。(13)に示すように，中英語期には定形動詞が接辞的否定辞neと副詞的否定辞notに挟まれたne V not語順が標準的な否定の形式であった。

(13) This Absolon ne roghte nat a bene
  this Absalom NE cared not a bean
  （c1395 *The Miller's Tale* 664）

この語順の派生を示したのが (14) である。

（14）ne V not型否定文の派生



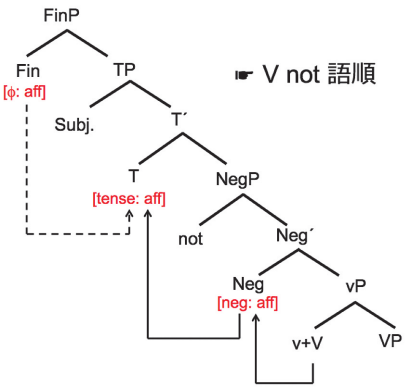
Fischer et al.（2000）などにしたがい，接辞的否定辞neがNegP主要部に，副詞的否定辞notがNegP指定部に，それぞれ基底生成されたと仮定しよう。動詞に前接辞化するneは，時制や一致の動詞接辞と同じように[affix]特性を持っていたと考えられる。すると（10）のアルゴリズムに基づき，統語部門において動詞語幹がTまで連続循環的主要部移動で上昇し，音韻部門でFinがTの動詞複合体ne-v-V-Tに接辞下降によって付加することで，ne V not語順が派生される。

接辞的否定辞neは中英語末までに消失し，かわって動詞の否定形はneを伴わないV not語順で表されるようになった（Jespersen（1940））。依然として動詞がnotに先行していたことから，neが消失した後も動詞語幹は引き続きTに主要部移動していたと考えられる。そこで，（15）の仮説を提案する。

（15）否定接辞neの消失後も，EModEを通して機能範疇Negに[affix]特性が随意的に付与された。

これは，Negがある種のゼロ接辞として機能していたことを意味している。Negに[affix]特性が指定されていた場合，否定文の動詞複合体は（14）と同じように形成される。

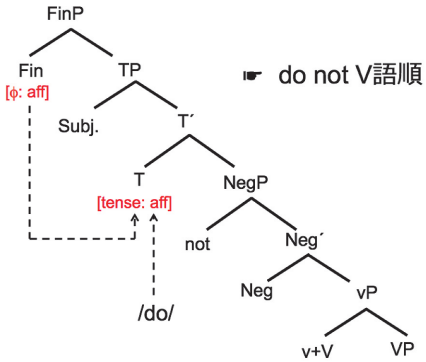
（16）c1600まで: [neg: affix]あり



Negは音韻的に空であるが，[affix]特性が駆動因となることで連続循環的動詞移動の中継点として機能する。

接辞的否定辞neの消失後はV not語順が標準的な否定の形式であったが，迂言的助動詞doを用いたdo not V語順もほぼ同時に出現し，徐々にその頻度を高めていった（2節図1参照）。この語順の派生は（17）のようになる。

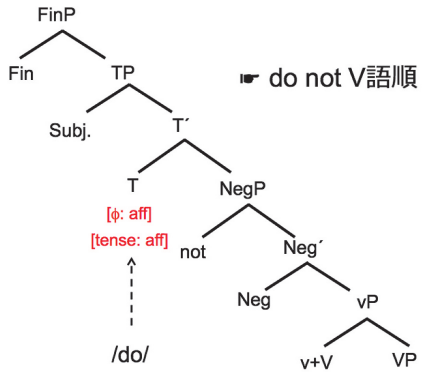
（17）c1600まで: [neg: affix]なし



本稿の枠組みでは，do not V語順はNegに[affix]特性が指定されていない場合に得られる形式として捉えることができる。（10a）で仮定したように，主要部移動のすべてのステップがその駆動因を持っていなければならないとすると，（17）において動詞語幹はNegに上昇することができない。そこで，当該の文に法助動詞またはhave/beが含まれない場合には，派生を救うために音韻部門においてTへのdo挿入が適用され，結果生じた複合体にFinが接辞下降する。このように（15）を仮定することで，否定接辞neの消失後，V not型否定文とdo not V型否定文が（次第に後者が増加しつつ）併存した事実を捉えることができる。

接辞的否定辞neの消失，およびそれに伴うNegへの[affix]特性の随意的付与が，動詞屈折接辞の衰退とは独立した変化である点に注意されたい。したがって，1600年前後におけるFinからTへの一致素性の推移後もNegには[affix]特性が随意的に付与され続けたと考えられる。まず，1600年以降の「貧しい一致の時代」にNegが[affix]特性を伴わない場合の派生は，（18）のように示される。

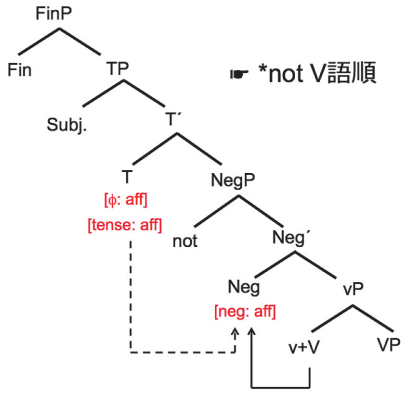
（18）c1600以降: [neg: affix]なし



この派生は，FinからTへの接辞下降が適用されない点をのぞいて（16）と同様である。動詞語幹は主要部移動の駆動因がないためにNegまで上昇することができず，派生を救うために音韻部門においてdo挿入が適用される。

次に，貧しい一致の時代にNegが[affix]特性を持つ場合の派生は，（19）のように表される。

(19) c1600-c1700: [neg: affix]あり



しかしながら，この派生は事実を正しく捉えることができない。動詞語幹がNegの[affix]特性が駆動因となってNegに上昇し，(10c) にしたがってTからNegへの接辞下降が適用されると，本動詞がnotに後続する語順が派生されることになる。ただしこの否定の形式はModEにおいて決して生産的ではなく，迂言的助動詞doが現れない場合は，豊かな一致の時代と同様に「本動詞－not」語順が用いられていた。

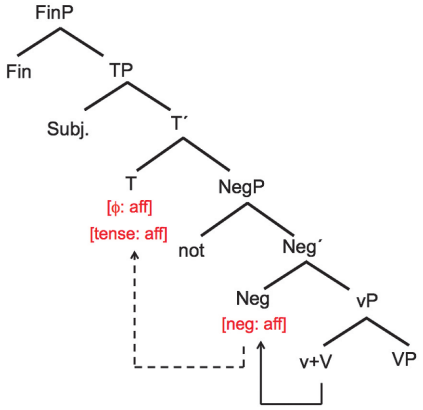
そこで，動詞語幹がNegに留まることを阻止する以下のPFフィルターを提案する。

(20) 二重詰めNegフィルター：
*[$_{NegP}$ not V]

これはNegPの指定部と主要部がともに語彙的要素で占められることを禁止するもので，Chomsky and Lasnik (1977) が提案した「二重詰めCOMPフィルター (Doubly-Filled COMP Filter)」のNegP版といえるものである。このフィルター自体は記述的なものであり，原理的な説明のためにはさらなる検討が必要であるが，もしNegPがフェイズであるとするなら，(20) はフェイズを構成するXPの指定部と主要部がともに音声的に具現化されることを禁じた「エッジ制約 (Edge Constraint)」(Collins and Radford (2015)) へと還元できるであろう。[6]

二重詰めNegフィルターが与えられると，(19) の派生は (21) のように修正される。

(21) c1600-c1700: [neg: affix]あり



先ほどと同様に，統語部門において動詞語幹がNegに上昇する。ここで，動詞複合体形成のアルゴリズム (10c) において「最上位の機能範疇XとYを融合する際には，「可能な限り」音韻部門における接辞下降が利用される」と但し書きが付されていたことを思い起こそう。(19) のように接辞下降を適用すると，(20) の二重詰めNegフィルターの違反が生じてしまう。そこで，(21) では音韻部門でNegからTへの主要部移動が生じて本動詞がTまで上昇している。これにより，貧しい一致の時代に観察された「本動詞－not」語順を正しく派生させることができる。ただし，EModE末までには徐々にNegが[affix]特性を付与されなくなり，(21) の派生は (18) よってとって代わられたと考えられる。

ここで，(9) に挙げた3つの論点に立ち戻って議論を整理しよう。まず (9a) の副詞と否定辞の変化のずれであるが，これは副詞を越える動詞移動と否定辞を越える動詞移動が異なる特性により駆動されていたことに起因する。前者は動詞の豊かな一致形態素に動機づけられており，これが1600年ごろに衰退するにともなって「本動詞－副詞」語順も消失した。それに対し，後者はNegのゼロ接辞特性が引き起こしたものであり，貧しい一致の時代もしばらくの間は (21) の派生が利用可能であった。

次に (9b) の疑問文と否定文の変化のずれであるが，すでに2節で概観したとおり，疑問文における主語と本動詞の倒置語順は，平叙文における「本動詞－副詞」語順の消失と連動している。これは，倒置を引き起こす統語部門のT-to-C移動が，同じく統語的なV-to-T移動を前提としていることから導かれる。豊かな一致形態素の消失とともに (11) の派生が (12) にとって代わられたことで「本動詞－主語」語順も消失した。否定文では引き続き音韻部門におけるNeg-to-T移動が可能であった ((21) 参照) が，この移動は統語的T-to-C移動の入力とはならないので，疑問文の「本動詞－主語」語順を派生させることはできない。

残された問題点は，(9c) の残留動詞移動の語彙特異性である。他の多くの動詞がEModE中に「本動詞－not」語順から「do not－本動詞」語順へと移行する中で，なぜknow類動詞がLModEまで否定文の動詞移動を保持し続けたのだろうか。(21) の派生がこれらの動詞に限って用いられ続けたというのは考えにくい。次節では，この問題について考えてみたい。

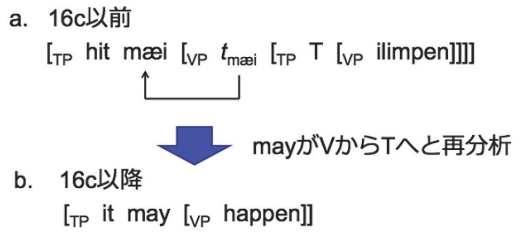
5．know類動詞の残留動詞移動

LModEで「本動詞－not」語順を存続させたknow, believe, doubt, careは，いずれも主語の認識や思考・感情を表すという共通性がある。とりわけ1人称主語で用いられた場合には，これらの動詞は話者の主観的な判断を表す。この点に着目し，本稿ではknow類動詞がModE期に文法化 (grammaticalize) し，軽動詞 (light verb) としての用法を発達させたと主張する。

文法化とは，意味の漂白や音韻的摩耗などさまざまな特徴をともなう語彙的変化の総称であるが，統語論においては，一般に語彙範疇が機能範疇化する変化を指す。

典型的な例がwillやcan, mayなどの法助動詞の発達であり，これらはもともと本動詞であったものが機能範疇要素に変化した。Roberts and Roussou (2003) は，法助動詞の発達を (22) の構造変化で説明している。

(22) 法助動詞の文法化



16世紀以前はmayは本動詞としてVに基底生成された後に主要部移動によってTに上昇していたが，16世紀以降はmay自身が助動詞として再分析され，Tに基底生成されるようになった。know類動詞との関連でいえば，法助動詞canがもともと古英語では‘to know (how to)’の意味を表していた点は興味深い。「…の仕方を知っている」の意味が転じて「…できる」を表す助動詞へと変化したわけであるが，同じような変化が，EModEにおいて本動詞knowに生じていたことになる。

また，Kume (2009, 2011) は，本動詞が助動詞へと文法化する際に，軽動詞としての段階を経ることがあると指摘し，Hopper and Traugott (2003) による「文法化のクライン (cline of grammaticalization)」を (23) のように修正している。

(23) 本動詞 > 軽動詞 > 助動詞 > 動詞接語 > 動詞接辞
(Kume (2009, 2011))

know類動詞はModEに軽動詞としての用法を発達させたが，canなどとは異なり完全に助動詞化したわけではなかった。本稿の分析は，本動詞から軽動詞への文法化を主張するKumeの一般化にさらなる支持を与えるものである。

では，know類動詞の文法化を裏付ける経験的証拠を見てみよう。文法化を進行させる要因の一つとして「主観化」がある。もともと客観的事実を述べるのに用いられた動詞が，徐々に話者の主観的認識を表すようになるという現象である。know類動詞はいずれも主語の認識や思考・感情を表すので，主語が1人称の場合に主観化を受けやすいという特徴がある。LModEでとりわけ高い頻度で残留動詞移動を示したdoubtを取り上げ，doubt not語順とdo not doubt語順が主語の人称ごとにどのように分布していたかを調査すると，表5のような結果が得られた。

表5：LModEにおけるdoubt否定文の人称分布（出現数）

	1人称	2人称	3人称	不明	計
doubt not	31	1	3	0	35
do not doubt	17	2	10	2	31

ここから，他者の心理状態を客観的に記述する3人称主語ではdo not doubtが優勢であるのに対し，話者の心理を主観的に表す1人称主語ではdoubt notが好まれることがわかる。1人称主語と3人称主語の具体例を (24) に挙げる。

(24) a. I **doubt not** the truth of a position which a man so learned has so confidently advanced.
(JOHNSON-1759-2,1,115.350)

b. The Patagonians **do not doubt** the mother's influence over both the physical and moral constitution of the child, as a sound strong tree produces large fruit.
(MIDSHIPMAN-1767-2,24.1_unnumbered_in_text.259)

人称による語順頻度の非対称性は，doubt not語順が話者による主観化の作用を受けていたことを示唆している。

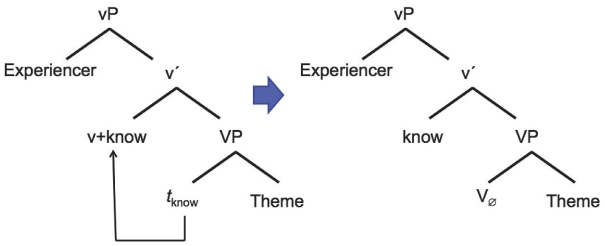
また，know, believe, careに比べてdoubtが高い割合で残留動詞移動を示したという事実も，know類動詞が文法化したことを示しているように思われる。他の3つの動詞と異なり，doubt「疑う」はそれ自体に否定的意味を含んでいる。このことは，doubtがany, in agesのような否定極性項目を認可することから明らかである。

(25) I {doubt/*believe/*know} that Lee has been to the theatre in ages.
(Huddleston and Pullum (2002: 836)（一部改変））

doubtの持つ「疑念」の意味は話者の強い主観的認識を表しており，他の語に比べて文法化の作用をより受けやすかったといえるだろう。

以上の議論に基づき，know類動詞はEModE期に (26) のような構造的再分析を受けたと提案する。

(26) know類動詞の再分析

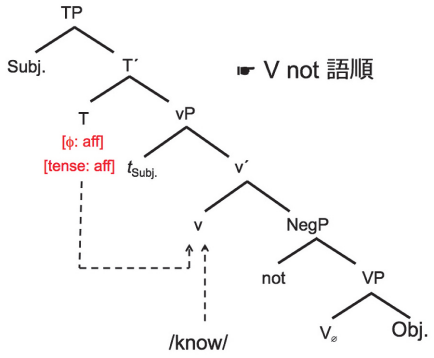


Chomsky (1995) 以来の標準的句構造では，本動詞はvPとVPの二重構造を持っており，いわゆる動詞語幹はVとvの複合体として形成される。know類動詞も，もともとはVとして基底生成されて軽動詞vに主要部移動していたが，文法化によってknowそれ自体が軽動詞であるとみなされるようになり，vに直接挿入されるようになった。この場合，Vは音形を持たない動詞として存在する。

knowなどが (26) 右の図のようにvとして再分析され

ると，vPとVPを構造上分裂させて扱うことができるようになる。言い換えると，Vと複合体を形成する義務を免れたvは，併合対象への選択制限が緩くなったのである。そこで，再分析後の否定文においては，vPがNegPの上位に基底生成される（27）の構造が利用可能であったと仮定しよう。

（27）know類動詞の否定文



vに直接挿入された軽動詞語幹に一致と時制の接辞が下降し，定形動詞が形成される。この結果，know-not語順が得られる。

EModEおよびLModEにおけるknow類動詞の発達をまとめると，図４のようになる。

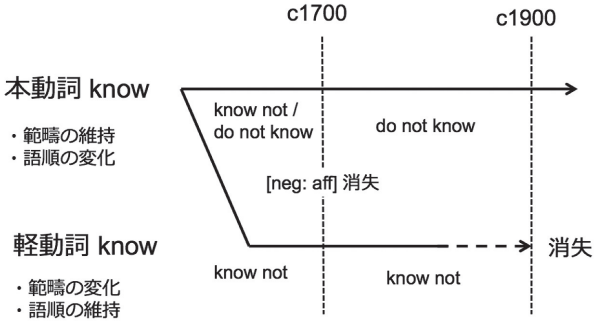


図４：ModEにおけるknow類動詞の発達

ModEを通じて本動詞としてのknowなどは存在していたが，それと並行してEModE中に軽動詞としての用法が発達した。このような新旧の用法の競合は，文法化の過程でよく見られる現象である。本動詞knowは範疇の一貫性を維持する一方で，1700年頃にNegの[affix]特性が失われてからは否定文でdo支持が義務的になった。他方，軽動詞knowはその範疇を変化させることで，know notという否定文の語順を維持した。

最後に，残留動詞移動の消失について触れておきたい。Bybee（2015: 133）は，文法化された用法が定着するためには，当該の項目が高頻度で使用される必要があると指摘している。中英語期のcanはこの条件を満たし，完全に法助動詞化した。それに対し軽動詞knowは本動詞を凌駕する事はなく，最終的にはLModE末までに消失してしまう。これはおそらく，他の圧倒的多数の動詞が「本動詞－not」語順から「do not－本動詞」語順へと移行する中で，十分な使用頻度を維持できなかったknow類動詞がその流れに逆らうことが難しかったためであろう。

６．まとめと帰結

ModEにおける動詞移動の消失過程をまとめた２節の図３に関連する移動の駆動因を付け加えると，図５のようになる。

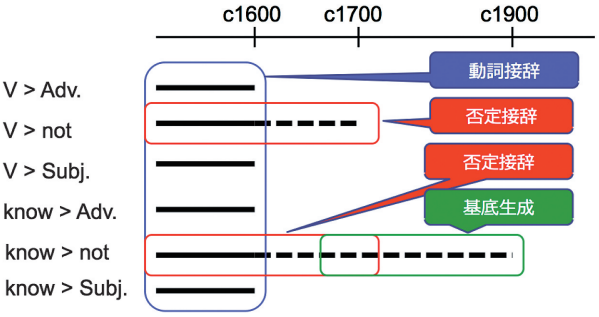


図５：動詞移動の消失と対応する駆動因

ここから，ModEにおける本動詞先行型語順は３つの要因により派生されていたことがわかる。「本動詞－主語」語順と「本動詞－副詞」語順は，ともに豊かな動詞一致形態素（より具体的には，Finによって担われる一致素性）に起因し，これらは1600年前後に一致素性がTに推移するとともに衰退した。また「本動詞－not」語順はNegの[affix]特性とPFの適格性条件「二重詰めNegフィルター」によりもたらされ，およそ1700年まで随意的に用いられた。最後に，know類動詞の残留動詞移動は文法化によるものであり，これらの動詞がnotに先行する語順は移動ではなく，基底生成により派生された。このように，いわゆる「動詞移動」は単一の統語操作ではなく，統語的・音韻的・語彙的要因が絡み合った複合的な現象であると考えることによって，ModEにおける動詞移動現象の全体像を捉えることができる。

もし本稿の分析が正しければ，動詞移動に関する共時的・通時的研究で問題となる「豊かな一致の仮説（Rich Agreement Hypothesis: RAH）」に関して示唆を与えることができる。一般に，動詞移動の有無と一致形態素の豊かさの間に何らかの相関関係があることが広く認められているが，争点となっているのは両者の間にどの程度強い因果関係が存在するかということである。Rohrbacher（1994），Vikner（1997），Koeneman and Zeijlstra（2014）が豊かな一致が動詞移動の必要十分条件であるとする「強いRAH」を唱えているのに対し，Bobaljik（2002），Haeberli and Ihsane（2016）は豊かな一致が動詞移動の十分条件にすぎないとする「弱いRAH」を主張している。

従来の英語史研究では，主として否定辞notとの相関関係に着目して動詞移動の消失時期を特定しようとしてきた。そうすると，1600年前後に動詞の一致形態素が衰退した後，少なくともEModを通じて「本動詞－not」語順が観察され，さらにknow類動詞を考慮に入れるとLModEまで動詞移動が存続していたことになる。ここ

から，英語史の事実は「弱いRAH」を支持すると考えられてきた。しかし，本稿が主張するように否定文における動詞移動が豊かな一致とは別の要因によるものであるとすると，「本動詞－not」語順の存否はRAHに関する議論には直接関係しないことになる。RAHの射程を統語的主要部移動に限定するかぎりにおいて，本稿の分析は強いRAHの立場を支持する。

* 本稿は，2016年9月8日に東北大学情報科学研究科で開催されたワークショップ「内省判断では得られない言語変化・変異の事実と言語理論」における発表を修正したものである。ワークショップ参加者から多くの助言をいただき，とりわけ大室剛志先生からは第5節の分析に対して有益なコメントを頂戴した。ここに記して感謝申しあげる。言うまでもなく，本稿に残された一切の不備は筆者に帰するものである。なお，本研究は日本学術振興会からの科学研究費補助金（基盤研究(C)，課題番号26370568）による成果の一部である。

注

1. 近代英語期は1500年から1700年までの初期近代英語と，1700年から1900年までの後期近代英語に区分される。現代英語は1900年以降である。
2. 用例の出典は，(13) をのぞいてPenn Corporaシリーズの表記法にしたがってテキストの略称と用例IDによって示す。各テキストの詳細情報についてはhttps://www.ling.upenn.edu/ hist corpora/を参照のこと。
3. いずれの文タイプにおいても，単純現在形と単純過去形を含む文を検索の対象とし，法助動詞およびhave/beを含む文は除外した。また，ここで集計の対象とした副詞には以下のものが含まれる。already, best, better, certainly, clearly, circumstantially, commonly, ever, exactly, falsely, hardly, never, often, partly, properly, quite, really, scarce (ly) , sensibly, sufficiently, wellなど。ただし，副詞が定形動詞に後続していても，I know the man well.のように現代英語でも許される語順である場合は，当該の副詞がVPまたはvPに右方付加しているとみなして集計から除外した。
4. Haeberli and Ihsane (2016) はTPとXP, XPとNegPの間に多くの細分化された機能範疇を仮定しているが，ここでの議論に直接関係しないので，(6) の図では省略してある。この構造で従来のT-to-C移動がどのように扱われるかはっきりと述べられていないので，「本動詞－主語」語順と「本動詞－副詞」語順の衰退の順序についてどのような予測をするかは不明である。
5. 本稿第3節および第4節における動詞移動の分析は，縄田 (2016) に基づくものである。
6. NegPがフェイズをなすという議論についてはAkahane (2006, 2008) を参照のこと。

参考文献

Akahane, Hitoshi (2006) "Inner Islands: A Minimalist Account," *English Linguistics* 23, 315–346.

Akahane, Hitoshi (2008) "Intervention Effects in Covert Movement Constructions," *Gengo Kenkyu* 133, 1–29.

Bobaljik, Jonathan David (2002) "Realizing Germanic Inflection: Why Morphology Does Not Drive Syntax," *The Journal of Comparative Germanic Linguistics* 6, 129–167.

Bybee, Joan (2015) *Language Change*, Cambridge University Press, Cambridge.

Chomsky, Noam and Howard Lasnik (1977) "Filters and Control," *Linguistic Inquiry* 8, 425–504.

Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.

Collins, Chris and Andrew Radford (2015) "Gaps, Ghosts and Gapless Relatives in Spoken English," *Studia Linguistica* 69, 191–235.

Ellegård, Alvar (1953) *The Auxiliary* Do: *The Establishment and Regulation of Its Use in English*, Almquist & Wiksell, Stockholm.

Emonds, Joseph (1978) "The Verbal Complex V'-V in French," *Linguistic Inquiry* 9, 151–175.

Fischer, Olga, Ans van Kemenade, Willem Koopman, and Wim van der Wurff (2000) *The Syntax of Early English*, Cambridge University Press, Cambridge.

Haeberli, Eric and Tabea Ihsane (2016) "Revisiting the Loss of Verb Movement in the History of English," *Natural Language and Linguistic Theory* 34, 497–542.

Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott (2003) *Grammaticalization*, Second Edition, Cambridge University Press, Cambridge.

Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.

Jespersen, Otto (1940 [1970]) *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Part V, Allen & Unwin, London.

Koeneman, Olaf and Hedde Zeijlstra (2014) "The Rich Agreement Hypothesis Rehabilitated," *Linguistic Inquiry* 45, 571–615.

Kume, Yusuke (2009) "On Double Verb Constructions in English: With Special Reference to Grammaticalization," *English Linguistics* 26, 132–149.

Kume, Yusuke (2011) "On the Complement Structures and Grammaticalization of *See* as a Light Verb," *English Linguistics* 28, 206–221.

Nawata, Hiroyuki (2009) "Clausal Architecture and Inflectional Paradigm: The Case of V2 in the History of English," *English Linguistics* 26, 247–283.

Nawata, Hiroyuki (2011) "Feature Inheritance as a Reflex of Diachronic Change: Evidence from

Transitive Expletive Constructions in the History of English," paper presented at the 13th International Diachronic Generative Syntax Conference.

縄田裕幸（2016）「I know not why—後期近代英語における残留動詞移動」『文法変化と言語理論』田中智之，中川直志，久米祐介，山村崇斗（編），192–206，開拓社，東京.

Pollock, Jean-Yves（1989）"Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP," *Linguistic Inquiry* 20, 365–424.

Roberts, Ian（1993）*Verbs and Diachronic Syntax*: *A Comparative History of English and French*, Kluwer, Dordrecht.

Roberts, Ian and Anna Roussou（2003）*Syntactic Change*: *A Minimalist Approach to Grammaticalization*, Cambridge University Press, Cambridge.

Rohrbacher, Bernhard Wolfgang（1999）*Morphology-Driven Syntax*: *A Theory of V to I Raising and Pro-Drop*, John Benjamins, Amsterdam.

Vikner, Sten（1997）"V^0-to-I^0 Movement and Inflection for Person in All Tenses," *The New Comparative Syntax*, ed. by Liliane Haegeman, 189–213, Longman, London.